

2006年10月5日

## 小さな素敵な秋み～つけたあ！ パート 伊勢原 大山編

旅人 水島 秀夫

爽やかな10月を迎えた霊山大山で、第26回「火祭り薪能」が夕闇迫る幽玄の世界で行われていた。西の空には茜がさし、霊峰大山には白雲がなびくなか厳かに、笛の音により古典芸能の幕が切って下ろされた。

平成18年10月3日(火) およそ300年前の元禄時代に起源を持つ「大山阿夫利神社火祭り薪能」の開演です。前座は地元大山伝統芸能保存会の「大山狂言座」の若手による日頃の研さんの演舞でおみみえ、狂言が二幕演じられた。中学生と高校生、大学生による緊張気味にもたくましい演技に、2000名を超える観衆の熱い拍手を受けた。

後半の舞台は二十六世観世宗家、観世清和氏の率いる三幕が上演された。高砂(能)、成上り(狂言)、葛城(能)の舞に、早秋の漆黒の闇に包まれた能楽堂もライトアップされ、いよいよ幽玄の世界へと導かれる。

幕間に伊勢原市観光協会会長・伊勢原市長の長塚幾子氏の歓迎の挨拶もあり、会場は水を打ったように静寂の場に変った。演舞者の「静」の表現と囃子方の音の激しさが、この伝統芸の極致と素人の私には思えた。晩秋の4時間はあっという間に過ぎ去り、しばし戦国の次代にタイムスリップしたような不思議な思を抱いた能見学であった。



### 【参考】

#### 能とは

能は約600年の歴史を持ち、舞踏・劇・音楽・詩などの諸要素が交じりあった現存世界最古の舞台芸術です。主人公のほとんどが幽霊で、すでに完結した人生を物語る、それが中心になっている不思議な演劇です。幽霊というと怖い内容のように思われるかもしれませんが、そうではなく時代や国によっても変わることない人間の本质や情念を描こうとしているのです。また、ギリギリまで省略された1つの動きの中にはいくつもの内容が込められ、一見無表情な能面には幾通りもの表情が隠されているのです。能は日本人が創りだし、長い間日本人が見続けてきた舞台芸術です。能に対する先入観を捨てて素直な気持ちで能に接してみてください。

#### その歴史

能の起源は定かではありませんが、五穀豊穡(ごこくほうじょう)を祈る民族芸能や田楽(でんがく)、物まね芸能の猿楽(ざるがく)、中国から伝わった散楽(さんがく)などが、互いに交流、影響しあって徐々に発展していきました。南北朝時代になると、大和猿楽の観阿弥(かんあみ)が將軍足利義満に認められ、京都へ進出しました。観阿弥は物まね本位の猿楽能に音楽性・舞踏性の要素を取り入れ、その子世阿弥(ぜあみ)は幽玄美を追求する夢幻能を確立させ、能をさらに高度な舞台芸術に育てました。江戸時代になると、能は武家の式楽として幕府に保護されました。幕府崩壊後は明治維新や戦争などの数多くの混乱を乗り越え、今日に至っています。